中浜東一郎をめぐる医療人脈（その２）

―三宅艮斎と万次郎との交友関係―

塚本　　宏

はじめに

中浜東一郎（１８５７－１９３７）の実母・鉄は、文久２（１８６２）年、江戸で大流行した麻疹（はしか）で急逝した。鉄は結婚後８年目、２４歳の若さで、一男二女、の幼児を遺して、さぞや無念のことであったろう。万次郎が、当時５歳だった長男・東一郎に医学を学ばせようという気持ちになったのも充分理解できるし[1)]、東一郎もまた、父の期待に応えて明治期の名医の名を辱めない医師として大成したと言うのが通説である。

さて、幼い３人を誰が養育し、学業を修める世話をしたのは、万次郎の再婚相手・琴（１８２８？－１８７５）[2)] しかいないはずである。「東一郎日記」には、熊本出張時（明治２７年７月）に当地の医師会幹部だった遠藤瑞雲の母から聞いた話から[3)]、肥後熊本藩の江戸詰め藩医・樋口立卓の妹、藩主の正室付きの奥女中であり、細川家江戸屋敷の祐筆を務めた才媛であったという[4)]。

では、再婚の世話をした人物が誰だったのか、「中濱萬次郎傳」には、「世話する者ありて、……二男を設けたる後、故あって離婚したり。」と記載されているだけである[5)]）また、樋口立卓なる人物についても詳細には語られていない。

これらの謎に迫ろうと思い立ち、新たに浮上してきた人物こそ、「三宅艮斎（ごんさい）」という蘭医であった。筆者はもとより浅学菲才のうえ、体調不良の身のため十分な史料・文献の渉猟もままならず、「謎解き」は、ほんのとば口に留まり、なお多くの探求の余地を残すものになり、ご容赦願いたい。

Ⅰ　三宅艮斎（１８１７－１８６８）とはどのような人物か

まず、順序として、艮斎の生い立ちから蘭方医として成功を収めるまでの経歴を要約して述べることにしよう。

以下は、幸い、彼についての優れた「評伝」を書いておられる曽孫・三浦義彰（１９１５－１９１０、元・千葉大学医学部教授・生化学専攻）と、玄孫・佐々木恭之助（１９４４～、元・東北電力（株）・常務取締役）両氏の著作を主として参照させて頂いた[6)、7)、8)]。

１）生い立ちと長崎遊学、佐藤泰然と江戸へ

艮斎は、文化１４（１８１７）年、肥前・南高来郡北有馬村で、祖父、父と代々医業の家に生まれた。文政７年、彼８才の年に初めて熊本に出て、当初、漢学を学び、その前年、長崎に着任しているシーボルトの影響であろうか、天保元年、１４才で長崎へ赴き、シーボルト（１７９６－１８６６）の弟子、楢林栄建（１８０５－１８７５）に入門を果たした。

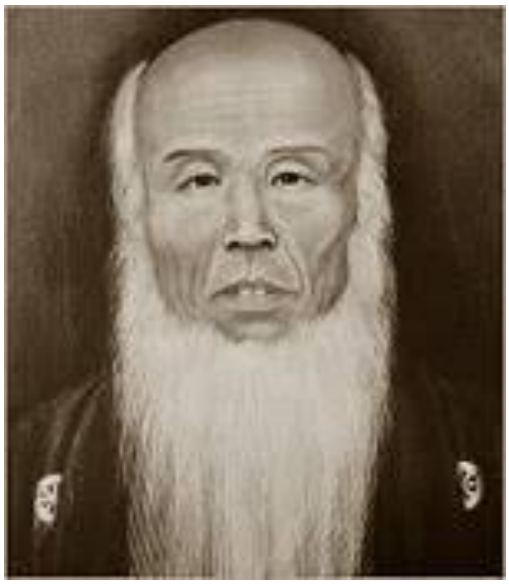
この楢林栄建は、実弟の楢林宗建（１８０２－１８５２）と協力し、幕末の大名から庶民に至るまで西洋医学の威力を見せ付けることになった牛痘の痂（カサブタ）による本格的な「種痘」の普及に貢献して近世医学史にその名を残した傑物であった[9)]。

栄建の門で８年間の研鑽を積み、当時、行われていた外科手術の大半は習得できた。同じころ、同門の先輩・佐藤泰然（１８０４－１８７２、当初、母方の和田姓を名乗る）の誘いに応じて林洞海らと共に江戸に移ることになった。泰然と洞海は、天保９年、両国薬研堀で蘭方医学塾「和田塾」を開設し、艮斎も同じく薬研堀で蘭方・外科医を開業した。

２）江戸から銚子、佐倉、再び江戸へ

艮斎より１３才年長の泰然は、単なる同門の先輩というだけでなく、生涯にわたり艮斎と親戚以上の親

交を重ねた恩人なのである。まず、天保１２年には、泰然の患者であった石山氏（幕府の小吏・大鋸頭梁）の長女・遊亀との結婚（艮斎２５才、遊亀１８才）の世話をしたし、さらに同年の１０月に、新婚早々の彼らの生計を楽にするため（この年は、幕府の天保の改革が始まり奢侈禁止令が出て江戸は不況だった）、下総の銚子港への転居を薦めている（この時、後に泰然の養子となる、若き日の佐藤尚中が引っ越しの手伝いをしたという）。



順天堂の開祖、佐藤　泰然

その後、泰然自身も、時の老中で幕末屈指の蘭癖大名として名高い堀田正睦の「医官」になり、城下佐倉に移住して、「順天堂」と名付ける病院と蘭方医学校を開設し（天保１４年）、多くの門下生を集め、西洋医学、特に外科の大家として、大阪の緒方洪庵主宰の「適塾」と並んで全国に声望が広めた[10]。今日の順天堂大学の開祖である。

弘化元年に艮斎も、泰然の推挙であろうか、藩主・堀田侯に招かれ「録三十俸」を受け、さらに藩主の息女・徳姫の病を治した功績を評価されて藩の「奥医師」に挙げられた。艮斎は２８才になっていた。

弘化４年になり、艮斎一家は再び江戸へ戻り、本所緑町で開業する（後に本所亀沢町に移転）が、翌嘉永元年には待望の長男・復一（のちの三宅秀（１８４８－１９３８、明治１４年、東京大学医学部長、明治２２年、わが国最初の医学博士）が誕生している。

また、安政５（１８５８）年に、艮斎は老中・堀田正睦が開港条約の勅許を得るために京都へ向かった際、臨時に「外科医」として随行することになった。攘夷派のテロが横行する京都だけに万一に備え、艮斎の起用となったようだ。幸い、約３か月の京都滞在も無事に終わり江戸への帰還を果たした。

３）蘭方外科医・三宅艮斎の実力と創意工夫

現在では、麻酔なしの外科手術は考えらえない。しかし当時、外科専門の艮斎の手術は「無麻酔」で行われていたのが特色である。執刀医の力量はもとより、屈強な手術介助者は必須であり、手術を受ける患者の側も相応の覚悟なしで手術は行えなかった。薬研堀時代から、艮斎が泰然の手術助手を務めていたが、天保１５年、佐倉へ呼ばれてからは、泰然と一緒に、帝王切開や四肢切断などの大手術も行っていた。

江戸へ戻ってからは、適当な助手がいないので、開腹手術はしていない。当時、カルテが不備で庶民の症例は不明だが、侍や大名の記録で、判明しているものを列挙すると次の通りである。

睾丸切除（山内作左衛門）、脂肪瘤除去（堀田摂津守）、陰嚢水腫摘出（堀田備中守）など。いずれも「腹膜外手術」で腹膜炎の恐れはなく、予後良好なものであった。また、手術当日には、見学のため患者の縁者や医師が集まり大変な賑わいであったという。現在から見ると蛮勇とも言える腕前の艮斎の面目躍如たる様子が見に浮かぶようである。

また、手術に必要な専用器具の制作も欠かせないわけだが、艮斎は独自に、有名な刀鍛冶職人に日本人

の体格に合わせた精巧な手術器具を作らせた。さらに、艮斎は、手術に伴う突発事故にも臨機応変の工夫を行っているが、幾つかの例を挙げると、応急の導尿に患者の台所のネギを、骨折の副木には海苔巻用のすだれを、食道を広げるのに扇子の親骨や厚紙を用いた、等々である。

４）好奇心旺盛な典型的教育パパ

このように、艮斎は優れた蘭方外科医であったが、それにとどまらず医学・薬学は勿論、実証的な自然科学の広い領域にわたって、興味をもち続け、好奇心（三浦義彰はキュリオジテと言っている）の塊のような人物であった。博物学の植物、鉱物にも造詣が深く、かのシーボルトにも多数の「鉱物標本」を提供したほどであった。

とても全てを紹介し切れないが、分かり易い例として、フランス製の「水銀バロメーター」を大枚小判１１枚で購入し、山内容堂の求めに応じて鮫洲のお屋敷に運ぶ途中、水銀を漏らして困惑したという話とか、家族に喜ばれた「曹達水製造機」（重炭酸ソーダと酒石酸からプレーン・ソーダ水が飲める仕掛け）や「磁器製の義歯」を米国から取り寄せたとか、さらに「ガンマニア」で連発短銃の弾丸まで作るなど、まさに時代を大きく先取りしたユニークな人物である。

同時に、一人息子の復一の教育については、①漢籍（杉山竹外の学塾、ここでは万次郎と机を並べて学習したという）から始め、②オランダ語は艮斎自ら、③英語（遣米使節団の通訳でトミーの愛称で知られる立石斧次郎の塾に住み込み)、さらに④医学（当初は横浜の宣教師・ヘボン、次いでアメリカ海軍の軍医・ヴェデルのもとで）をそれぞれ学ばせている。熱心な教育パパのおかげで、後年、復一は、明治政府における医学教育の大立物・三宅秀男爵として大成することになったので、おおいに評価できよう。

５） お玉が池種痘所の開設、再建と濵口梧陵

もう一つ、艮斎の功績として見逃してはならないのは、幕府公認の種痘所建設とその再興、さらに大学東校へと発展に関わったことである。

江戸で最初の種痘館「お玉が池種痘所」が開設されたのは、安政５（１８５８）年５月である。その前年、伊東玄朴の呼びかけに応えて江戸在住の蘭方医８２名（当然、艮斎も参加した）が、川路聖謨を介して幕閣あてに種痘館設立願いを提出し、老中・堀田正睦が承認する旨回答したことから一気に実現の運びとなった。多くの賛同者の拠金５８０両余りをもって、神田松枝町（現・千代田区岩本町２丁目）に川路の拝領地を借地として、伊東玄朴を始め当代随一の先駆者８０余名が成し遂げた偉業[11]であった。

しかし、好事魔多し、この年１１月には近くの相生町から出火した火事により、僅か７カ月で類焼し全焼する、という憂き目にあってしまう。直ちに種痘所再建は決議されたものの、資金集めは困難を極めた。半年ほど前に、同志一同財布をはたいて拠金したばかりだったので、事情は十分理解が出来よう。

ここで、立ち上がったのが艮斎で、その熱心さに感動して、二度にわたり、３００両、７００両、都合７００両もの大金を寄付して援助したのが濵口梧陵（１８２０－１８８５)、その人であった。

文政３年、紀州広村の生れ、元禄年間から銚子で醤油醸造業（現・ヤマサ醤油）を創めた濵口家・７代目当主で、世に「富商、豪商、侠商、紙商」と称され、尊敬を詰めた。戦前の国語読本で「稲むらの火」の主人公のモデルとして有名[12]。

実は、艮斎と梧陵が終生の「師友関係」になったのは、天保１２年、艮斎が銚子で開業を始めた時からで、艮斎２５才、梧陵２２才であった。開業医として生計を立てるにあたって、濵口家の援助を受けたことは間違いなく（三宅秀の回顧談)、梧陵もまた銚子のような辺鄙の地にあって無二の珍客として遇したと想像される。とくに、艮斎が長崎留学以来、見聞した種々の物語、欧州文明諸国における科学の進歩と異なる風俗人情等を聞いて、梧陵がその若き胸を躍らせたこと、如何ばかりであったか。艮斎が佐倉へ移ってからも、二人の交友は絶えることなく、江戸へ上る途中であったので、梧陵は事あるごとに訪問していた。また、ヤマサの番頭の背中に出来た癰（よう）の治療や、近隣に強盗が押し入り、十人余りの怪我人が出たときも、駆けつけて手当てをしたという。両者の友誼の深さが偲ばれる逸話である[13]。

話を戻すと、艮斎、梧陵らの働きによって、翌安静６年９月には、伊東玄朴宅裏で下谷和泉橋通りの藤堂屋敷に土地を求め、種痘所の新築-・再建が完成した。

その後、文久元（１８６１）年に幕府がこれを接収したうえ、「西洋医学所」と改名し、教授、解剖、種痘の３科に分けた．艮斎はここで教授に任命され、包帯学、外科手術を担当した。さらに、多くの変遷を重ねながら、発展を重ねてドイツ医学中心の東京帝大・医学部になったことは、すでに、このテーマ（その１）で述べたとおりである（当会の「研究報告・第７集」ご参照)。一言付言するなら、明治期の初頭、ここの教授、教官の大半が、佐藤泰然、尚中の順天堂・門下生であったことも注目してよい。

Ⅱ　艮斎と万次郎との交友関係

三宅艮斎のユニークな人物像の説明に手間取って、ようやく、われらの主人公、万次郎との交友関係という本題に入ろうとしている。実は、既に述べた箇所で両者の関係を知るための伏線は敷かれているので、重複を恐れず話をすすめることにしよう。

１） 万次郎と艮斎との付き合いは何時から？

数少ない貴重な史料として、「万次郎肉筆の日記」（残念なことに安政６（１８５９）年７月から１０月までのごく短期間のもの）が中浜家に保存されており、その釈文が活字化されて読むことができる[14]。ここには当時、英学（主として英会話であったと考えられる）を学ぶために芝新銭座の江川塾を訪ねる多くの知識人との往来(圧倒的に頻度の高いのは土佐藩鮫洲のお屋敷に住んでいた細川潤次郎だが、その他、平野廉蔵、大鳥圭介、箕作麟祥、川路聖謨などの名前も見える）や、すでに同年２月に万次郎は、幕府から「鯨漁御用」を拝命していた[15]ので、捕鯨の計画、準備の模様に関する記載が伺える。

三宅艮斎も、この「万次郎日記」の中に３回、登場してくる。

８月１７日　「…細川潤次郎本所ニ住居候医師三宅艮斎へ罷出候由、」

９月２２日　「…早朝より三宅艮斎へ罷越、面会之上亀沢町団野源之進＜妻・鉄の実父＞へ参りより…」

９月２３日　「…てんまニ而本所へ三宅医師を出迎えニ差遣し、五つ時頃当屋敷へ罷越、早々並山形御船ニ而さみつ＜鮫洲＞土佐屋敷へ罷出、御上御逢有之候ニ付夜入出船。五つ時鯨漁船へ立寄、大船之てんまニ而三宅医本所を為相送候。…」

前述した通り、艮斎が京都から江戸へ帰還したころ、つまりこの日記の前年・安政５年夏から、江戸ではコレラが大流行する。その後、毎年夏に小流行を繰り返したので世情不安となり、予防はおろか治療法も定かではないこの時期、外科医の彼もコレラ患者の診療に苦慮する。詳細は不明ではあるが、艮斎は土佐藩の医官を兼務してコレラ患者の救護にあたった（「安政６年、土佐侯山内容堂に召され俸二十口を賜る」との記録がある）[16]。上記、「万次郎日記」に記載された艮斎と御上（勿論、容堂)、万次郎、細川潤次郎らとの出会いはこの問題とみて差支えなかろう。

２） 艮斎、長男を同道して捕鯨船・壱番丸に試乗

マニアックな好奇心の塊とも言える艮斎の性格はすでに述べたが、次に万次郎との関係でぜひ知ってほしい史実をご披露したい。

艮斎は蒸気機関の模型船（堀田侯からの借り物）にだけに飽き足らず、実物の蒸気船の見物に品川沖に度々訪れるのである。しかも土産に前日、買い入れた野菜まで持参してというから凄い。それが高じて、遂に、万次郎が船長を務める捕鯨船「壱番丸」へ試乗することになる（文久元－２（１８６１－６２）年の冬のことであろう)。

ご存知の通り、万次郎が、アメリカでの実体験に基づく捕鯨技術に対する自信と誇りは大きく、平野廉三と協同して行った小笠原での捕鯨事業[17]は有名である。東一郎も著書のなかで、平野が一代の事業として手掛けた、捕鯨を含む航海事業のほか、石油事業、製氷事業、さらに水道敷設事業など、成功を見ないまま未完に終わったものの「一世に先んじて国家社会の為めに尽さんことを主眼としたるもの」と高く

評価している[18]。

ここでは、話を艮斎に限って紹介してみよう。後に壱番丸と改名したアメリカから買い入れたスクナー船の試運転の日には、長男・復一を連れて試乗している。この日、天気晴朗であったが北風が吹き、東京湾内も帰途は逆風で船足が鈍ったとのこと、勿論、船の運用は万次郎が務め、測量器使用のデモも行われた。この時は、オクタントを使用したが、艮斎は後に、堀田侯所有のセキスタントを借り受けて、しばしば自宅で観測をしたようだ。「キュリオジテ」の塊、そのものの艮斎であった。

３）万次郎撮影の艮斎夫妻の肖像写真

万次郎と艮斎とが親密な交友関係にあったことを示す、重要な証拠の一つに、万次郎が撮影した艮斎夫妻の肖像写真が残されている（筆者自身は未見だが、東大・総合研究博物館小石川分館所蔵の「近代医家三宅一族旧蔵コレクション」）。下記の２枚の写真がそれである[19]。万次郎の「写真術」を研究している専門家・谷昭佳（東大史料編纂所画像史料解析センター）も、万次郎が撮影したアンブロタイプの写真である可能性が高いと解説している[20][21]。

文久２年、万次郎の撮影した三宅艮斎

艮斎の妻、遊亀（撮影年代不詳）

もともと艮斎は、江川坦庵の主治医であり（ともに本所に在住の縁もある）、臨終に際しても早くから医師団に加えられた昵懇の仲[22]で、土佐藩との繋がりからも万次郎との交友が深まったと考えられることから、撮影場所は芝新銭座の江川邸内であったことが容易に推察される。

さて、左上の艮斎は、４０才台半ばの働き盛り、なかなか精悍な風貌、好奇心旺盛な性格が感じられるが、手に持つ分厚い本は、「借り物のウエブスター辞典」だという。筆者の推測では、福沢諭吉が万次郎と一緒にサンフランシスコで購入したことで有名なウエブスター辞書そのものであろう。中浜家に保存されているものは、「…大きい。黒革の背表紙、濃緑色の表紙、６１０頁で使い古された」１８５９年版だ[23]ということからほぼ間違いない。一方、妻・遊亀の方は、当時、３０才代後半のはずにしては随分老けて見える。紋付の羽織の下に幅広の黒繻子の襟が一見スカーフのように覗いていていかにも「下町のご新造」という感じだと三浦は評している。

４）樋口立卓との関係は？

いよいよ、残ったのは、艮斎、万次郎と樋口立卓の関係や如何に？、というのが難問である。正

直、言って筆者の力不足により、樋口に関する決定的「決定的な史料」が極めて少なく、情報収集も不十分なのである。

まず、冒頭に述べた「東一郎日記」の記載を手掛かりに、樋口立卓（生没年不明）が、肥後熊本藩の御典医の家系で、３代元賀、６代元貞に続いて江戸詰めの８代目にあたり、幕末の第９代藩主・細川斉護、その正室・盆（安芸広島藩主から輿入れ）に仕えた人物であることまでは確認することが出来た[24]。　さらに、佐藤泰然の養子で二代目順天堂主を務めた佐藤尚中を師とする約１１０人の門人名簿「慶応元年順天塾社中姓名録」の中に、樋口立卓の名前を発見し[25]、その写真版も入手した。

ここからは、あくまで筆者の推察の域を出ないが、①艮斎は佐倉順天堂の佐藤泰然、尚中，二代にわたるトップと親密な関係にあったこと、②万次郎の妻・鉄が急逝した当時、艮斎は捕鯨船への試乗、夫妻の写真撮影、など親密な関係にあって、中浜家の家庭事情を詳しく知っていたこと、③藩主の正室に仕えて祐筆まで務めた才媛ながら婚期の遅れた（今日の社会常識では考え難いが）妹・琴（当時、３５才と推定）を持つ立卓のことを聞き知っていたと類推しても無理はなかろう。「はじめに」述べた通り「世話する者ありて……琴女を後妻に娶りたる」の世話人ないし仲人役を務めた人物が三宅艮斎であった可能性は極めて高いと信じたい。

それにしても、万次郎は、琴との間に西次郎（元治元（１８６４）年生れ)、慶三郎（明治元（１８６８）年生れ）の二男を設けながら、「…故あって離婚した」という。しかも、琴が熊本に戻ってからも、「再び中浜家に召喚せられんことを望」んでいたと年来の友人に語っていた[3]というから謎を深まるばかりである。

結びにかえて

東一郎が実母・鉄の急逝後、大学東校に入学するまでの養育と修学についは、明治政府の「学制」公布（明治５年）以前であるから、今日のような系統的な初等教育を受けようはない。まずは、家庭内で父・万次郎の薫陶を受け「英学の基礎」を個別指導されたに違いない。

一方、義母・琴からも当時の寺子屋と同等以上の手習いを受けたと推測される。「東一郎日記」の中で、彼が興に乗って度々、「漢詩や短歌」を書き記していることや、名著「中濱萬次郎傳」の美文調の文章に接すると、さすがに藩邸で祐筆を務めたという琴の教養の高さを垣間見る思いを禁じ得ない。

さらに、短期間ではあるが、東一郎は、横浜・十全医院（現・横浜市立大学医学部の前身）に入り、伝道医師・セメンズ（有名なヘボン（James Curtis Hepburn（１８１５－１９１１）とともに横浜の近代医学発展に貢献した Duane B.Simmons（１８３４－１８８９）のこと）の通訳を兼ねて医学を修業した[26][27]。これまた推測の域を出ないが、琴の兄で医師の樋口立卓の影響を否定することは出来ないであろう。

いずれにせよ、三宅艮斎、樋口立卓両医師の存在抜きには、東一郎の医学志望は考え難いのではなかろうか。

以上、三宅艮斎と万次郎との間に、親密な交友関係があったことは、ご理解いただけたものと自負する一方、多くの優れた万次郎の「伝記」の中では、全くと言って良いほど、「三宅艮斎のこと」には触れず、無視されているのは、何故であろうか。残念ながら、この疑問に答えることが出来ないまま稿を終えなければならい。諸賢のご批判、ご教導を賜れば幸いである。

注

１）中浜明『中浜万次郎の生涯』、（冨山房、１９７０年)、２５８－２５９頁

２）琴の生年は、落合静男の第２回万次郎忌報告「ジョン万次郎の墓について」の「墓碑銘から推定した（当会の平成２４年度「研究報告・第３集」、５０頁)。

３） 中浜明編『中浜東一郎日記　第一巻』、（冨山房、１９９２年）、２０２－２０４頁
４） 中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ　ジョン万次郎』（講談社、２００７年）、１７２頁
５） 中浜東一郎『中濱萬次郎傳』、（冨山房、昭和１１年）、２３６頁
６） 三浦義彰「三宅艮斎略傳」、『文久航海記』（冬至書林、１９４２年の篠原出版復刻、１９８８年）、３－４９頁
７） 三浦義彰『医学者たちの１５０年　名門医家四代の記』、（平凡社、１９９６年）、参考までにここでいう「四代」とは、①宅艮斎、②三宅秀、③三浦謹之助（秀の長女・教の夫、東大医学部教授）、④著者・三浦義彰の４人である。
８） 佐々木恭之助「三宅秀とその周辺」、『日本医史学雑誌第５１巻第３号』、（２００５年）、４０９－４３０頁、参考までに、この方は、秀の四女・菊尾の夫、佐々木謙一郎（専売局長官）の孫に当たる。
９） 広瀬　隆『文明開化は長崎から下巻』、（集英社、２０１４年）３８５－３８８頁
１０）佐藤泰然と佐藤尚中の伝記は、『順天堂史、上巻』、（順天堂、１９８０年）、第二編、第一章、第二章を参照
１１）広瀬　隆、前掲９）、３９８－４００頁
１２）河村純一『濵口梧陵と医学』（崙書房出版、２００８年）、９７－１０６頁
１３）杉村広太郎「濵口梧陵傳」、『楚人冠全集第７巻』、（日本評論社、１９３７年）、１７－２０頁
１４）川澄哲夫編著『中浜万次郎集成』、（小学館、１９９０年）、７１５－７２７頁
１５）前掲５）２５１－２５７頁
１６）中村一郎『蘭医佐藤泰然―その生涯とその一族門流―』、（房総郷土研究会、１９３７年）、巻末・略年表、１２頁
１７）後藤乾一「ジョン万次郎・平野廉三と小笠原―幕末維新期の洋式捕鯨をめぐる一考察―」、アジア太平洋研究』№２９、（２０１７年）１－２１頁
１８）前掲５）３４７頁
１９）前掲６）の「口絵写真」
２０）谷昭佳「解説２　日本写真史における中浜（ジョン）万次郎の位置とその周辺）、『写真集　日本近代化へのまなざし　韮山代官江川家コレクション』（吉川弘文館、２０１６年）３８頁
２１）幅泰治「初期の写真の歴史―古写真を理解するために―」、前掲２）、９１－９８頁参照
２２）仲田正之『江川坦庵』、（吉川弘文館、昭和６０年）２３７－２３８頁
２３）中濱博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』、（冨山房インターナショナル、２００５年）、２２５頁
２４）インターネット検索により、「細川氏（肥後熊本藩主家）」、「新・肥後細川藩侍帳」、「細川藩における医師（一）、（二）」などの調査
２５）前掲１０）、２３４－２３６頁
２６）花房吉太郎・山中源太郎編「日本博士傳」、（博文館、明治２５年）、１５９－１６２頁
２７）荒井保男『ドクトル・シモンズ　横浜医学の源流を求めて』、（有隣堂、平成１６年）